

高収益林業の促進

この地方の人工造林率は高く、林種転換による量的人工林の拡大というより単位面積当りの生産力を増強する質的面的向上に期待するところが大きい。このため

(1) 林分の中から選抜された精英樹による優良種苗を確保するための母樹園を設置しこれが急速な増殖をはかるため育苗施設を整備して生産の増大に努めている。

(2) 早期育成林業を推進するための方策として、優良種苗と共に林地肥培の技術普及を推進し、適地適木品種のための土壌診断を行なうと共に、地力の維持改善技術の普及奨励に努めている。

林業経営の近代化

経済の成長発展と社会生活の進歩向上に即応し、林業の自然的、社会的、経済的制約による不利を補正し、林業の発展を期するためには林業経営の近代化が必要である。このため昭和四十一年より林業構造改善事業を芦北町において、三カ年間七千五〇〇万円を実施し、経営と生産基盤の充実、資本整備等林業の総合的施策を実施する。このほか、森林組合の育成強化、機械化協業化、後継者育成のための教育、林業の知識技術の普及を活

を進捗中である。なお、この幹線林道と有機的につながる林業経営林道を重要度の高い地域より逐次工事にかかり、林道網の拡充強化に努めている。

森林資源の増強

林業生産の基盤である林道を骨格とするならば、森林資源の造成はその肉の部分にあたる。われわれは豊かな肉つけをしなければならぬ。この地方には民有林だけでまだ一万畝の未開発天然低質広葉樹林が残されているが、山相雄大、山岳重疊、地味肥沃にて、雨量三千弱に達し、林木の生育には適しているが、人間の生活環境としては不適合か人口密度は極めて低く、地元所有者自からによる森

芦北郡湯浦町の古石林研が三十五年、古田林研が三十六年に結成されたというから、日はまだ浅く、会員数は、両方とも一、二、三名程度。古田林研では、三十八年に四〇〇の試験林を設け、南九州各地の杉、松、檜の優れた品種を二〇種余り、約三千本を植えている。狙いは優れた樹種の内、自分たちの山にはどの木が

適地適木の開発も

湯浦町の林研クラブ活動 適するの、か、いわゆる適地適木の開発をはじめ、林地肥培や手入れの方法で、どの様に成長が違うのか、実際に自分たちの手で確かめ活用しようというもの。こうした、理論に加えて実践的

矢部町の目丸地区と御所地区のわさび研究グループが一語になつて、矢部町わさび生産組合を結成したのが、昭和三十八年三月。現在、約二三町の畷石式のわさび田には、七名の組合員の熱心な管理で、四万七千本近くのわさびが、順調に成長している。

矢部特産品のニューフェイス

目丸、御所の両地区とも標高六〇〇呎、北面の斜面で、水温も四季を問わず平均一四度前後の湧水地帯、その上、水量も豊富と数少ないわさび栽培適地の一つ。県林業改良指導員の下技師の熱心な指導もあって、三十七年一月から、それぞれの地区に約〇・七畷の試験田で栽培を始め、三十七年の十二月から一月にかけて、北九州市場に約二〇キを初出荷。好評を博し、これに自信をえて両地区が合併、農業協

発に行なうことになっている。

森林の保護

この地方には、森林害虫として、松くい虫とスギタマバエの発生を見ており、特に松くい虫は芦北林業の大敵である。このため害虫防除の原則として早期発見、早期徹底駆除をはかるが、県の林業研究指導所で実用化した誘殺剤オシモンル(砒弗化亜鉛剤)を取り入れて松くい虫の防除に万全を期している。

林道網の拡充強化

道路交通のないところに林業の近代化は望めない。五家荘の林業開発は、まず林道網の拡充である。三十三年完工した椎原二本杉の幹線林道に引続いて、現在、五家荘下屋敷線の幹線林道(延長二・二基)に着工、現在一二基の開設を終り、昭和四十四年完工目標に向って工事

林資源の造成は多くを望めない。そこで開発の担手として、県では五家荘林業公社を設立し、一〇カ年間に二千畷の造林を目標に地元と一体となって事業を推進し、三十六年以降五カ年間で九〇〇畷の分収造林を完了し、目標に向って着実に歩み続けている。

宇土、上下益城地方

都市近郊の林業へ

最近、公害防止のための緑化や、学校、公園、家庭、工場等の緑化熱が高まり、緑化観賞用苗木の需要が増大し、この地方(特に城南甲佐)にその生産が盛

な意欲は、これからの林業経営に最も大切なことの一つでもある。すでに、大宇や営林局、遠くは沖縄や中国からも来訪があり、先進地との意見交流にも積極的。そのほかにも土壌の検査を初め、枝打ち、さし穂など林業全般にわたる研究から生れる効果は、

数多い。これまで植えるだけで品種も知らないという、いわばカンだけに頼っていた経営から、自分の山の材積や、適正価格の判断など、科学的な目も開けたという。苗が小さく、植付がむずかしいとされている外国樹も、クラブ員は、九五・六の活着率を上げる実績をみせている。

同化資金四〇五万円を開田を行なった。人も通らなかつた溪流の繁みをかきわけの開田作業には、約半年の日数と、延千五〇〇名の労力を費したという。苦勞が大きかっただけに、組合員の結びつきは固く、研究意欲も旺盛。わさび栽培は、場所により管理方法も違い、教科書通りにはいかないところあって、自分たちで実地に研究を積み重ね、さらに先進地の技術や

市場調査もおこたらない。

合併後、まだ出荷はなく、資金的にも今が一番苦しい時期。しかし、来年少く、予定通り出荷が軌道にのれば品不足で高値を呼ぶ生わさびのこと、資金の回転も容易になる。

将来、矢部町の特産品の一つとして脚光を浴びることが期待される産物である。

五家荘地方

球磨・天草を除いた城南地方の林業について、述べてきたが、芦化地方は、木材需要構造の変化にもない坑木林業から用材バルブ生産林業への推進転換の問題と共に、新しい木材需要に対応した合理的生産技術体系の確立の問題があり、五家荘地方は近代化のための動脈林道の整備と森林資源の増大増強の問題がある。宇城、上・下益城地方は、矢部林業の開発はもとより、その他の地域は熊本

市近郊という自然的、社会的、経済的条件的のもと、他産業と対応調和した新しい林業への脱皮推進という大きな課題を内包している。

酒どころ

御船町で酒づくりが始まったのは寛保年間。これは、県下の酒づくりの初まりでもある。当時はほとんど赤酒で、清酒の醸造が本格化したのは幕末頃から。酒づくりに要求される良質の米と水、それに気候風土ともあいまって、大正中期から、昭和十年頃にかけての全盛時には、一軒の造り酒屋が軒を並べ、酒といえは御船、御船といえは酒といわれるほどの繁栄を示した。

現在の醸造元は二軒。年間千三〇〇詰近くが生産され、企業近代化への努力も地道に続けられている。

城南町も、酒どころとして名を知られているが、ことに近代化の意欲がめざましい。普通、酒の醸造は温度などの関係で十一月から三月頃までの寒い時期に行なわれるが、城南町の酒造会社では、酒庫を冷房して、冬の自然条件と同じ環境で十月から七月頃まで操業する、いわゆる長期醸造という全国的にも、数少ない技術を実用化している。

城南地域の

複線化電化

昨年十二月、国鉄と宇土一八代間線増工事の利用債引受け契約を調印、いよいよ城南地域の複線化が実現されることになった。

熊本までについては、昨年十月電化が完成、スピードアップや輸送力が増強されたが、複線化も四十二年度末には完成する予定である。

熊本以南の複線化は、宇土一八代間についての契約を終り、四十三年度末には完成し、八代までの輸送量は三倍強になる見込み。八代以南の全線複線化については、国鉄の第三次長期計画には入っていないが、単線でも、もはや行き詰っている区間では、部分複線化することになっており、県内では湯浦一津奈木間について工事が行なわれている。

電化については、第三次長期計画によると鹿兒島まで完成、熊本一袋間は四十年年度中に着工、四十三年度末には完成の見通しである。つまり、四十三年度末までには、八代まで複線電化され、八代以南まで延びることになる。このほか、熊本に電車基地がつけられ、熊本を中心とした鉄道輸送力はさらに強化、近代化され、大都市との経済、文化の交流が活発になると思われる。

開発メモ

鹿兒島本線複線化、電化

|        |         |
|--------|---------|
| 複線化    |         |
| 荒尾一熊本  | 45.0km  |
| 川尻一宇土  | 5.6km   |
| 宇土一八代  | 24.8km  |
| 湯浦一津奈木 | 8.7km   |
| 計      | 75.4km  |
| 電化     |         |
| 荒尾一熊本  | 78.8km  |
| 熊本一袋   | 85.2km  |
| 計      | 164.0km |

昭39.3~昭43.3 (大野下~玉名) 昭40.8完成  
昭36.9~昭43.3 (川尻一荒尾) 除き完成  
昭40.6~昭44.3 昭40.9完成, 10.1間通 昭44.10完成予定 (計画未定)